



新橋小学校

# 学校だより

令和4年9月30日

令和4年度 第6号

## 変わりゆく「集団と個」について

校長 西尾琢郎

いつの頃からか「シルバーウィーク」と呼ばれるようになった9月の連休は、二つの台風が日本に上陸または接近するという大荒れの天気になりました。皆さまはどのように過ごされたでしょうか。

このシルバーウィークという言葉が広まったのは、いわゆる「ハッピーマンデー法」が施行されて、敬老の日が9月の第三月曜に定められてからではなかったかと思えます。それにより、9月23日の秋分の日との関係で、それ以前よりも休日が連続しやすくなったことがきっかけでした。

日本では長い間「働き過ぎ」が社会の課題とされ、国はその解消に取り組んできました。その結果、日本の祝日は、今では世界第三位の多さになっています。このランキングで上位を占める国々は、その多くがアジア圏の国々だそうです。それはアジア圏の各国が歴史的に稲作を中心とする農業を主産業としてきた中、人びとは労働力を集約して農作業に励むことが求められ、ひいては「東洋型専制」と呼ばれるような中央集権政治が形成されてきたことと関係しています。つまり、これらアジア圏の各国では、労働とは集団規律の中で行われるものという意識が強く根付いていて、仕事を休むことについても「全体の休日（祝日）」を設けなくてはなかなか実現できない面があると考えられるのです。「休む」ためにも「みんな一緒」が求められがちなのが日本だったというわけです。

しかしそうした取り組みの中で、学校からは「皆勤賞」が姿を消し、企業の休暇も昔のようにお盆や年末年始のみに「一斉に取得する」形から、ある程度の期間の中で、それぞれに取得するといった形が中心になってきました。それはこの社会が、農業から工業へ、そして情報やサービスへと産業の構造を大きく変えてきたこととも連動しています。にもかかわらず、私たちの意識は、まだ十分にかつてのスタイルから抜け出せていないと感ずることがあります。学校にも根強く残る「そろえる」ことへの価値意識は、その最たるものではないでしょうか。本校を含む公教育には「平等・公平」が強く求められます。公的に提供される教育である以上、当然のことです。ですが本校では「結果の平等」より「機会の平等」を大切にしていきたいと考えています。「結果の平等」が、すべての子どもたちに同じ一律の指導を提供しようとするものであるのに対して、「機会の平等」は、一人ひとり違った個性を持ち個別の環境の中で生まれ育ってきた子どもたちに、可能な限りそれぞれ必要な支援を提供し、人生のスタートラインに着く機会を平等に手渡していきたいということです。

子どもたちも、そして私たち大人も、一人ひとりが違った個性をもつ存在です。それを「そろえる」ことに力を費やすのではなく、個性を引きだし、伸ばし、磨いていくことを大切にしたいと、私たちは思います。学年間の違いはもちろんのこと、同じ学年の学級間でも、そこにいる子どもたちや、教員の個性はさまざまです。公教育に求められる指導のレベルや内容を担保しながらも、私たちは子どもや教員それぞれの「よさ」や「思い」を大切に、学校づくりを進めていきたいと思えます。近年報道されることも多い「学校での生きづらさ」も、実は本来違った個性を「そろえる」ことに力を注ぎすぎてきたことへの反動なのではないか、そんな風を感じるからです。

まもなく、3年ぶりに全校児童が一堂に会しての運動会です。全員が集う中にも、それぞれの子どもの個性が輝くような場面が見られるよう、児童自らによる推進委員を中心にした活動が進められています。ご観覧の皆さまには引き続きの我慢をお願い致しますが、何卒ご理解をいただきますと共に、本番当日だけでない、そこに至るまでの子どもたちの活躍に寄り添い、声援をいただけますようお願い申し上げます。